

2. 「舞姫」の学習指導

高木 徹

1. 「舞姫」の教材としての位置

高等学校「現代文」の教科書の多くに森鷗外の作品が採られており、「高瀬舟」「妄想」などを載せている場合もあるが、多くは「舞姫」である。「舞姫」を載せていない教科書でも、同じ教科書会社から別の「現代文」教科書が出版されていて、そちらには「舞姫」が載せてある場合がほとんどである。

ということからも「現代文」教科書において、「舞姫」は最も人気があり、定着した教材であることがわかる。

2. 「舞姫」を学ぶ意味（指導要領との関連から）

中学校の国語教科書では、目次のあとに、単元（または教材）ごとの目標・学習内容などを記した一覧表がついていて、それを見れば、教師も生徒もその教材で何を学ばせる（学ぶ）べきかわかる仕組みになっている。

ところが、高等学校の国語教科書にはそれがない。それぞれの教材が、指導要領のどの事項を学習するためにその教科書の中にとられているのか、わからないのである。

現行の『高等学校学習指導要領』（昭和53年8月文部省）の中から、「第2章各教科 第1節国語 第2款各科目第4現代文」の全文を以下に引用する。

1 目標

近代以降の優れた文章や作品を読解し鑑賞する能力を高め、ものの見方、感じ方、考え方を深めるとともに、進んで読書することによって人生を豊かにする態度を育てる。

2 内容

次の事項について指導する。

ア 論理的な文章について、主要な論点と従属的な論点との関係を考え、論理の展開や要旨を的確にとらえること。

イ 文学的な文章について、主題、構成、叙述などを確かめ、人物、情景、心情などを的確にとらえること。

ウ 文章や作品の読解、鑑賞を通して、人間、社会、

自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりすること。

エ 文体、修辞などと内容との関係を考え、表現上の特色をとらえること。

オ 語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにすること。

カ 目的や内容に応じた様々な読み方を通して、文章の読解、鑑賞を深めること。

3 内容の取扱い

(1) 教材は、近代以降の文章や作品とし、ある程度まとまったものを主として取り上げるようにする。なお、近代以降の文語文や翻訳作品を含めることを考慮する。

(2) 近代の文章や文学の変遷については、作品の読解、鑑賞の参考になる程度とする。

(3) 参考文献を適切に利用して、調べたことを文章にまとめて報告したり、討議したりする機会を適宜設けるようにする。

「内容」のア～カの各事項について考えると、ア以外ならどれでも「舞姫」にあてはまりそうで、指導要領のどの事項を重点的に指導するための教材として、「舞姫」が教科書に載せられているかはわからない。「内容の取扱い」にある「近代以降の文語文」として「舞姫」が教材化されているらしいということがわかる程度である。

なお、新しい『高等学校学習指導要領』（平成元年3月 文部省）でも、「現代文」の記述は、表現力重視の傾向にあることを除けば、大きな変化はない。

従って、「舞姫」で何を教えるかは、完全に教授者に任せられているということだろうか。

3 「舞姫」を学ぶ意味（教師用指導書との関連から）

それでは、教科書編集者は「舞姫」で何を学ばせようと考えているのか。教科書指導書からその意図を探ってみたい。

本校では、筑摩書房『現代文 二訂版』を使用しているので、その『学習指導の研究』（いわゆる教師用指導書）から引用する。『現代文』年間学習指導計画

（試案）の中に、教材ごとの「学習目標」が、「主要学習事項」と「学習指導上配慮すべき事項」とに分けて記されているので、それを以下に紹介する。

主要学習事項

- 1 近代小説創始期の作品にふれ、近代初期の若々しい文学精神と近代文学の伝統を感じる。
- 2 小説を総合的に豊かに読み進め、自分の読み方について客観的な自己批評が出来る。
- 3 一般的な小説の学習方法とともに、作品の特殊性を生かした方法をもみつけ出す。
- 4 言文一致以前の近代の文語に接し、その味わいを知るとともに、近代小説のことばの面における発展にも目を向ける。

学習指導上配慮すべき事項

- 1 指導者の範読、学習者の朗読を通して、文章の調子に馴れさせて、文語文の言語的困難を克服する。
- 2 日本の近代化、東洋と西洋、島外の思想などの問題についても、その所在や深さに気づき、主体的に生きる糧となるような適切な指示をしたい。
- 3 「舞姫」については研究が深化し多様なので、その実状を概観しておきたい。

これらの「学習目標」は、高度な国語力を持つ生徒には妥当かもしれないが、「舞姫」を読んで「古文を読んでいるような感じ」を持つ生徒の多い本校では、なかなか達成困難な目標である。

範読や朗読で文章の調子に馴れることぐらいはできるだろうが、文語文の言語的困難を克服することはおぼつかない。文語文の読解にこだわっていたら、小説として豊かに読み進めるどころではなくくなってしまう。さらに、石橋忍月の「愛と功名と両立せざる人生の境遇」や、佐藤春夫の「封建人が近代人となる精神変革史」といった論から、前田愛の都市論まで紹介して、深化し多様な研究の実状を概観しようとするならば、授業についてこられる生徒はいなくなってしまうと思われる。

4. 現代語訳を用いた「舞姫」指導の試み

以上に述べたような理由で、「舞姫」を指導する際には、その目標設定に迷うわけだが、本校の生徒を対象にした場合、あれもこれもど欲張っていては、結局何も教えられなかったということになりかねない。

そこで1989年度、高校3年生に「現代文」で「舞姫」を教えるにあたって、現代語訳を与えて言語的障壁を取り除き、「小説として読み味わう」ことに目標を絞って指導を行った。

授業に入る前に、5月の連休の宿題として、難解な語句の意味調べを課しておいた。

そして、現代語訳と、かなり詳しく語句の意味を記したプリントとを配布して授業に入った。

授業は教科書で行い、現代の小説と同じように読解・鑑賞を進めた。わからない箇所のある生徒は、それぞれ現代語訳や語句のプリントを見ながら、授業を受けるという形態であった。難解な語句・表現であっても語訳そのものにはあまり時間を割かなかったせいで、小説としての流れを見失わない程度の速さで授業を進めることができた。

（注）現代語訳は、『名古屋近代文学研究4』（1986年12月）に掲載した拙訳を使用した。これは原文ができるだけ忠実に訳しながらも、文脈をつかみやすいよう言葉を補ったり、難解な語句の後には語訳を付けたりして、生徒が理解しやすいよう多少工夫を加えたものである。また、語句の意味のプリントとしては、『新現代文 指導資料』（三省堂）の「表現と語句」をコピーして使った。

5. 学習終了後の調査より

「舞姫」の学習終了後、生徒に簡単な調査を行った。以下が、その調査項目と結果である。

ア 教科書の本文と頭注だけで「舞姫」を理解できる程度は？ という問い合わせに対して、

他の現代文と変わらない	2%
他の現代文より少し難しい	46%
他の現代文よりかなり難しい	45%
全然わからない	6%

イ 現代語訳のプリントは役に立ったか？ という問い合わせに対して、

かなり役に立った	49%
少し役に立った	42%
役に立たなかった	9%

ウ 語句のプリントは役に立ったか？ という問い合わせに対して、

かなり役に立った	31%
少し役に立った	50%
役に立たなかった	9%
その他	10%

現代語訳や語句のプリントなど役に立ってほしくない、という期待に反して、役に立ったとする生徒がかなり存在していることがわかる。

6. 生徒の作文から

年度末の最後の授業で、「1年間で最も印象深い教材」について作文を書かせた。

「舞姫」の学習指導

最も印象深い教材として「舞姫」をとりあげた生徒は、全体のおよそ3分の2に及んだ。「舞姫」が印象に残った理由として、最も長い時間をかけて学習した教材であること、「現代文」の授業のなのにまるで古文のような文語文に面食らった生徒が多くいること、「語句の意味調べ」という宿題を出された唯一の教材であること、ちょうど「舞姫」を学習していた時期に郷ひろみ主演の映画が公開されたと、等々があるだろうが、作品そのものの魅力にひきつけられた生徒もいると思われる。

以下に、生徒の作文をいくつか紹介する。

A 私は、中学生の時に森鷗外の作品を授業で読んで興味を持ち、たまたま「舞姫」の本を買いました。でも中学生の私には本に載っている注意書きだけではわからず、結局、読めないでいました。そして高3になって、授業でやったときとてもうれしくて、授業中も先を先を現代語訳を見ながら読んでたりしました。今どき“純愛物語”が新鮮でとてもいい話でした。現実派と言われる私は、一途で清純なエリスも好きだったし、優柔不断で残酷な豊太郎も好きでした。3年前に読めなかった本も読めましたし、授業で「舞姫」をやめてよかったと思います。

B やはり、一番長くかかった「舞姫」が印象に残っている。本を読むのがわりと好きな私は、たいてい国語の教科書を4月に手渡された時、説明文で全く興味がない内容や、ややこしくて理解しにくい話以外は、ほとんどに目を通してしまうのだが、「舞姫」は、その“長くてわけわかんないから読まない話”の中に入っていた。「こんなに長くて、読んでも意味のわかんない話は、たぶんやらないでとばしちゃうだろう。」という私の予想に反して、しっかり教材の中に取り入れられた。それも、意味を調べてこいという課題付き。(以下略)

C 私にとって、一番印象に残っている教材は、教科書で読んだ、森鷗外の「舞姫」です。

授業で習う前、読んでみようと思い、読み始めたけど、古い文体なので読みづらく、途中でやめてしまいました。

しかし、授業で習い始め、先生が配ってくださった、現代語訳のプリントと照らし合わせて読んでいくにつれて、古い文体も気にせず読み進んでいけるようになりました。

私は小学生の頃から本を読むのが大好きなので、しばらく読書らしきことをしていなかった私に、「舞姫」は、久し振りに読みごたえのある物語でした。

先生が自ら訳したプリントのおかげだと思います。

D 一番印象の深いものと聞いてすぐ思いついたのは、「舞姫」です。何よりも、難しかった、というのが感想です。文語調であることが、もちろん難しかったのですが、全体的に森鷗外の文章は難しいと思います。それに話の内容も、大人の愛・地位・人間関係といった、まだ私には経験のないことで、理解するのには、いささか苦労しました。(以下略)

E 教科書で「舞姫」の文章をはじめて読んだ時、まるで古文だ、と思った。何が書かれているかほとんどわからなく、自分でこうではないか、という具合に適当に考えて読んだのだが、後で、なんだ、こんなことだったのか、と思う箇所が随分たくさんあった。対訳のプリントのおかげなのだが、「舞姫」そのものの文章を味わうというよりも、話の内容を理解するだけが精一杯だった。(以下略)

F 私は「舞姫」が一番印象に残っています。(中略)
「舞姫」は名大附以外の高校でも使われている教材らしく、私の通っていた塾の3年生の子たちはみんな口々に「『舞姫』は難しい。」と言っていました。私が「舞姫」の全訳を持っていると言うと、みんなにコピーしてくれと頼まれました。全訳を渡す先生は他の学校にはいないのでしょうか？ 私は全訳があったので内容もしっかりと理解でき、読んでいても楽しかったです。そのためでしょうか、私はその時の国語の定期テストで学年トップでした。(以下略)

G 最も印象に残った教材は「舞姫」である。おそらく他の誰もがそうではないかと思えるほど、印象深い。文章自体は現代の表現ではなかったので、とっつきにくかったが、これ以上は無理という位授業の数が多くだったので大変たしかった。それに現代語訳にも大いにたすけられた。そのおかげで、見た目のむずかしさのみにとらわれることなく、作品の持つおもしろさや、訴えかけているものに触れることができたと思う。内容については、これから的人生で否応なしにせまられる選択というものの厳しさ、重大さを考えさせられた。作品の主人公ほどのエリートでなくとも、社会に出たとき、いや高校を卒業した頃くらいから、自分独りではなく周囲をまき込む選択をすることになるのだろうと、今真剣に考える。

A～Cのようにどちらかと言えば読書好きの生徒でも、授業で取り扱わなければ、読まなかつたり途中で挫折したりしてしまうらしい。それにしても、A～G

として紹介した文章が、国語の成績では中位から上位の生徒のものであることを考えると少々情けない。その辺の事情は、定期テストで一番の成績を取れるような生徒(F)が「全訳があったので内容もしっかり理解できて」と書いていることからもわかるだろう。

国語力の低い生徒にも、「舞姫」を小説として読み味わわせるとを目標として、現代語訳を配ったのだが、かなり国語力のある生徒にまで現代語訳が役立ってしまったのは意外である。「文語調の持つリズムを失った現代語訳を読んだって『舞姫』を読んだことにはならない。」という気持ちもあり、現代語訳を与えることについては、自分自身でも抵抗を感じる部分もある。が、それでもしなければ、内容を理解して豊太郎やエリスの生き方について考えるところまで至らないであろう生徒をかかえている以上、やむを得ない方法ではないだろうか。「『舞姫』というのは、なかなかいい小説だ。」という印象を生徒に残し得たとしたら、それが成果かもしれない。「もう一度、先生の訳を見ずに、読んでみたいと思います。」というようなことを書いている生徒が二、三人いたが、授業がそういうきっかけを与えたということで満足すべきであろうか。

残念なことに、作文の中で鷗外の華麗な文体に触れた生徒が一人もいなかたのは、文語文を読み味わうことの目標としなかったせいだろう。ただ、「エリスが、ドイツ女らしいらしい感情の表現をしているのに、文語調で、『豊太朗ぬし、かくまでに我をば欺きたまひしか。』とか言ってしまうところが、なかなか毎回笑わせてもらった。」と鋭い指摘をする生徒もあり、文語文ということに、今後どれだけこだわって行くべきなのか迷うところである。

7. 「舞姫」の現代語訳に際しての問題

「舞姫」の学習指導に現代語訳を使うことが妥当であると仮定しても、その現代語訳には様々な問題がある。

まず、生徒の国語力に応じて、どの程度まで現代語に置き換えるべきかという問題がある。訳せば訳すほど原文から遠ざかってしまうので、できるだけ原文で

理解できそうなところはそのままにしておきたいし、かと言って、読んでもわからないような現代語訳では使わない方がましである。筆者の場合は、現在教えている生徒の国語力を念頭に置いて訳したが、一語一語について訳すべきかどうか頭を悩ませた。そういうわけだから、本校の生徒に適切な現代語訳であっても、他校の生徒には適切ではないということも考えられる。本校の生徒よりも国語力のかなり高い生徒（そういう場合は現代語訳は不要だろうが）には、筆者の現代語訳では冗長だろうし、逆に低い生徒にはわからないことがあるだろう。（例えば、現代語訳でもそのまま使った、一人称の「余」がわからない生徒もいるかもしれない。）

次に、文語調のリズムが生かせないのは当然のこととしても、現代語に置き換えるのが不可能な箇所がある。最も顕著なのは、エリスから豊太朗にあてた手紙の現代語訳である。この手紙の部分は文末に丁寧語が使われていないが、現代語訳した時に文末表現に丁寧語（つまり「です」「ます」体）を使わないでは、現代の手紙の常識からすると変なものになってしまう。丁寧語を使わないと奇妙な手紙文になってしまい、丁寧語を使うと原文に忠実でなくなってしまう、という問題が生ずるわけである。

8. おわりに

このように現代語訳自体が問題を含んだものであり、それを学習指導に生かしてゆくとなると、賛否両論あろう。古文のような授業に陥るか、「舞姫」を教えることをあきらめるか、そのどちらかを選択するしかないような生徒を抱えていて、その中間の道として今回のような指導を試みた。「舞姫」は何としても教えるべき教材なのか、或はそこまでして教えるほどの教材ではないのか、それなら「舞姫」に代わる教材として何があるのか。そういった問い合わせに対する明確な答えは見つかっていないと思われる所以、今回の指導方法に若干の手直しを加えながらも「舞姫」を教えて行きたいと考えている。